は Ταξιλα 卽ち沙門の居るといふことからして此頃既にガンダラ地方からヒンドクシュ山脈を越えてバクトリアに佛教が及んで居たものと論じて居る（Lassen; Indische Alterthumskunde II. S. 1093.）紀元前七十年の頃には最早希臘のバクトリア王國は亡んでしまつて月氏の領になつて居ることは明らかであるからして、當時バクトリアに佛教があらば、もとより月氏に佛教が傳はつて居たものとせねばならぬ、其後月氏が今のペシャワール地方に據つて愈々佛教が盛になり、終に名高い迦膩色迦王の時代となつては其全盛期に達し、布教使の如きも四方に出た樣である、康居、安息等月氏附近の諸國に佛教の傳はつたのも、いつを始めとすべきかは能く分らないけれども、とにかく此王の時に盛に布教せられたことは疑ないことであろう、そうして此等の諸國の僧侶が上にのべた樣に支那にもはいつて來たのである、斯くいふて來ると、勢ひ王の時代は何時であるかといふ問題に入らねばならぬけれども、之は既に屢々論議せられて然もいまだに決着して居ない事でもあり、最近にも印度のマツラから之に關係した金石文が現はれた樣なわけであるからして今は只だ紀元二世紀の第三クオーターの前後に在位した王であろうといふことに止めて置きたい、ともかくも印度より月氏王國に入り、更に近傍諸國に傳はつた佛教は、俄然として紀元百四十八年後漢の桓帝の時からして再び支那に現はれて、暫らく絶えて居つた跡をつぐ樣になつた、それで月氏以下の諸國はもとより支那より以前に既に佛教を奉じたのであるが、之が行はるゝに當りては、其經文は尙ほ梵語の儘で行はれたものであつたろうか、かゝる問題は是迄此地方の一般の歷史が殆んど打ちやられて居つたに伴ふて、あまり研究されなかつたらしく、佛教史風のものにもとんと其消息をのべて居ない、漢譯の佛典のことに入る前に、先づ此事を考がへて置く必要がある、贊寧が宋の高僧傳の滿月傳の後に論を附して居るものを見ると、流石にその博